

「地域子育て支援拠点事業」が、子ども・家庭支援に果たす役割

<はじめに> 子ども・子育て新システムの基礎給付に「地域の子育て支援事業」として位置づけられている「地域子育て支援拠点事業」は、「すべての子育て家庭」の多様なニーズに応える身近な拠り所として、また、**地域の支えあいの根幹**として、当事者と必要な支援をつないでいる。具体的には、虐待予防、育休中の社会との接点、一時預かり、障害児支援、異世代交流、父親の育児参加、親のエンパワメント、地域コミュニティ活性化など、「子育て支援の全体像」を描くにあたり、必要な機能をきめ細やかに担っている取り組みがある。また、市町村と共にNPO等の市民が参画する**新たな社会連帯**として**包括的に地域の子育て支援の資源をつなぐ**役割も果たしている。

「地域子育て支援拠点事業」は、すべての子育て家庭のセーフティネット！

育休中も含めて、3歳未満児の親の約8割は、保育施設以外で子育てをしているが、「地域子育て支援拠点事業」は、**「すべての子育て家庭」**を対象とした事業であり、年間のべ約3,264万人^(※)の親子が利用している。その利用者像とニーズは多岐にわたり、当事者(子育て家庭)と地域の社会資源をつなぐ潤滑油、触媒的な機能を持つ**地域の互助システム**として子育ての孤立化や負担感を軽減する役割も担っている。

※年間のべ利用=1ヶ所平均6,676人×4,889か所 (H21年ひろば全協調査)

<多様なニーズ>

- 初めての子育てに不安
- 身近な相談
- 子どもの発達が不安
- 出会い・交流
- 情報交換
- 一時預かり
- 実家が遠い
- 里帰り利用
- 虐待予防

地域子育て支援拠点

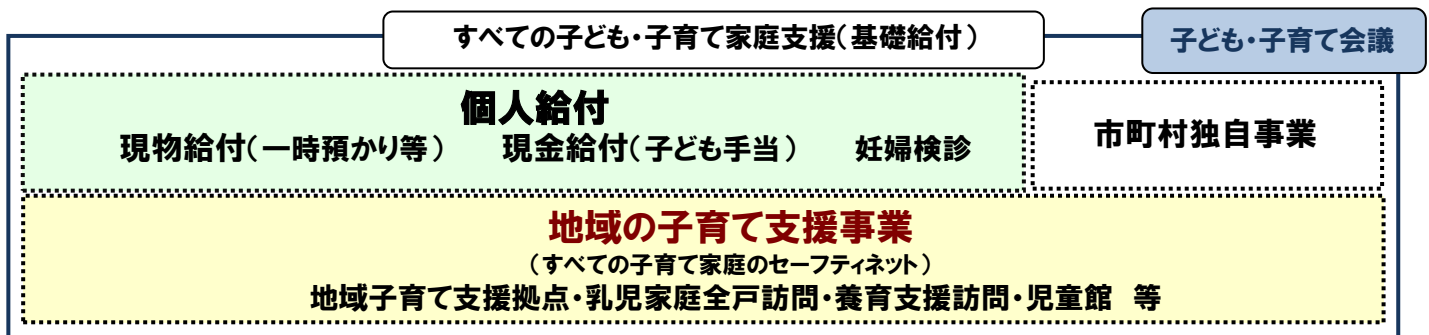
- ◆子育てひろばと保育園の両方
を利用しながらパート就労
- ◆祖父母と孫
- ◆育児休業中
- ◆休日の父親と子ども
- ◆ひとり親家庭
- ◆多胎児
- ◆転入者
- ◆子育てひろばで一時預かり
を利用しながらパート就労

<多様な利用者>

地域の子育て力をはぐくむ地域子育て支援事業を土台に、各市町村に当事者性を取り入れた「子ども・子育て会議」設置を！

「地域の子育て支援事業」は、**当事者に最も近い場所**でニーズを把握し、すべての子育て家庭のセーフティネットとして機能する**「基礎給付の土台部分」**である。その上で、個人給付、さらには2階部分の幼保一体給付があると考えたい。よって、地域の子育て支援拠点事業には全給付費の一定割合が充てられ、子育ての第一歩から確実に支える仕組みとなることを求めたい。

また、地域子育て支援拠点は、第2種社会福祉事業に位置付けられ、すべての子育て家庭対策として積極的な位置づけのニーズがある。地域の子育て力がアップし、子育て中の親が社会と繋がるためには、**当事者の声を取り入れた子ども・子育て会議を各市町村に設置**し、NPO等の多様なステークホルダーが参画できる仕組みが必要と考える。さらに、子ども・子育て会議は、単なる諮問機関でなく、事業評価、監査、勧告ができる組織として設置されることも望みたい。



個人給付の枠組みで一時預かりを保障

地域子育て支援拠点での一時預かりは、実家に子どもを預けるような感覚でゆだねられる身近な心の拠り所である。育児ストレスを抱えつつも、子どもと離れることに不安感を持つ親がいる中、地域子育て支援拠点での**日頃の様子を理解**した上で信頼感を持って預かってもらえることは、親の心の安定につながる。また、親支援だけでなく、子どもにとっても**親以外にも信頼できる大人が関わる中で育つ**ことは、子ども自身の心の安定や成長発達につながる。

また、**個人給付の枠組みで一時預かりを保障**することは、さまざまな理由で行き詰まった育児に第3者が介在する機会、社会全体で子どもを育てる機会を促進すると考えられる。



育ちあい

◆2年前、2歳だった息子はトラブルメーカー。おもちゃを取ったり、お友だちを訳もなく押し倒したり、息子が行く先々で泣き声上がる。「私の育て方のせいなのか」とひどく落ち込んだ。それから2年、4歳になった息子はすっかり面倒見の良いあんちゃんだ。下の子たちには優しく、同い年の子とは言葉で思いを伝えながら楽しそうに遊ぶようになった。その成長した姿がとても嬉しい。

◆母親達は学びあい励ましあい、子ども達はいろんな大人とかかわりながら遊び、まるで大きな家族のようでした。子育てで大事なことは、すべて支援センターが教えてくれました。人間関係が希薄な今であっても、人と関わることでしか解決できないこともあるのだと気付かされました。

支える

◆家に缶詰で、夜泣き、後追い、授乳、おむつ交換、離乳食、家事が私の生活の全てでした。ほとんど誰とも会話をすることが出来ない状態で、24時間休みなしの育児。「この子は、自分を困らせるためにいるのでは?」、そんな考えがよぎる自分に日々罪悪感を覚えていました。

ある日、泣きながらすがってくる子に大きな声で怒鳴り散らしてしまいました。自分が情けなく、また子どもに申し訳なく、涙が出てきました。それと同時に体から湧き上がってくる強いやり場のない怒りが自分でも恐ろしくなり、「15分でも30分でも預かって」と、わらにもすがる思いで託児所へ。しかし断られ、途方にくれ、頭が真っ白になってしまいました。

そのとき「支援センターならきっと話を聞いてくれる」とぼんやりした頭で、電話していました。「お母さん一人では子育ては無理。抱え込んではいけない」と、子どもを慈しんで育てられない私を責めることなく、励ましてくださいました。

◆3歳の長男は2歳半の時、自閉症と診断されました。多くの問題と向き合う日々です。障害という大きな壁を越えられない私に、先生方はいつも笑顔で接してくれました。そして、私と息子のために、一人で遊ぶスペースを作ってくれました。息子にはすごく大事なスペースです。不安な気持ちを落ち着かせて、また出て遊ぶ勇気をくれます。障害を理解していなければ、対応は違うと思います。

そんな笑顔の力もあり、私も少しずつ笑えるようになりました。そして気付いた事。ママが笑っていないと子どもも笑ってくれない。子ども達と皆さんの笑顔に救われ、私の世界は色をもどしていきました。



つなぐ



◆実家が遠い私にとって大きな心の居場所となった。子育ての喜びも悩みも分かち合える。他愛のない会話で笑い転げたり、時には転勤していく友だちに涙したり。一人じゃない、みんなで子育てしていきけるって幸せ。

◆急な転勤で福岡から沖縄へ。右も左もわからない土地での初めての子育て。どんなに淋しく心細かったか……。ある日、先輩ママから「ママと離れて友達と遊べるようになったさ。成長しているさ〜」と。この言葉がどれだけ嬉しかったことか。沖縄に来て「一人で子育てがんばらない」と、肩に思いっきり力をいれていた私。自分の子どもをちゃんと見ていてくれる人がいるということ。私は一人じゃないんだと肩の力が抜けていくのがわかりました。

地域の人たちと

◆小学3年生の今もフリーマーケットや、玉ねぎほり、などいろいろな楽しい行事に参加することができました。また、学校の帰り道、ひろばの前を通ると、いつもスタッフの人たちが、声をかけてくれるのでほっとします。ひろばの前の薬局のおばさんも、おぼえてくれているので、ちょっとてれくさいです。(ひろばの元利用者)

◆そこでは5、6人のおばあちゃん達がサポーターとして積極的に子どもと関わり、遊んでくれていた。その優しい眼差し、大らかな包容力、あったかい手。和やかな空気ですっぽり包まれてしまった。「ママっていうものは、ただでさえガミガミ言っちゃうものでしょう。いいのよ、ここでは黙って見てなさい。暴力とやんちゃは違うんだから」そう言って「やんちゃ」な息子を自由に遊ばせてくれる。喧嘩も勉強。経験豊富なおばあちゃん達がいつも見守ってくれる。

